みつどもえ－参拝中！

Dandyy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
みつどもえ一参拝中！

【Ｎコード】
Ｎ８２８６Ｐ

【作者名】
Ｄａｎｄｙｙ

【あらすじ】
日本一似てない小学生の三つ子。ちょっとおませなサドガール・長女「丸井みつば」　ちょっとスケベなマッスルガール・次女「丸井ふたば」　ちょっと不思議な暗ガール・三女「丸井ひとは」　この丸井三姉妹が織り成す破天荒な小学生ドタバタ・ショートコメディー！！……を、小説にしてみました

（前書き）

みなさん、こんばんわ！（こんにちは、かな？）この度、「みつどもえ」で小説を書かせていただきました、Ｄａｎｄｙｙです！あっちではちょっとは名の知れた存在です。あっちってどっち？

「みつどもえ」が好きすぎて、小説の題材にしてみました。著作権とか……大丈夫かな？過去に誰もチャレンジしてないから、不安すぎて内蔵が破裂しそうです。桜井先生に張り倒されないか心配です。最初に謝ります、ごめんなさい

さて、「みつどもえ」の持つ、絵で伝わる笑い、スピーディーなコマ割り、そんなものをすべてかなぐり捨てての挑戦です！……劣化甚だしいと思われます

でも、一生懸命書きました。それだけは自信を持って言えます！これがうまくいったら、また再挑戦しようかなと思います。では、前代未聞の「みつどもえ」小説を……どーぞ

「あけましておめでとうっス！！！！」

1月1日。丸井家。次女ふたばは、朝からハイテンション。今日から新年の幕開けなのだ。紺のキャミソール1枚に下はスパッツだけの姿で、結んだ短髪をピコピコ動かしながら、2階から降りてきた。

「ひとはーっ！あけましておめでとうっスー！」

「おめでとう」

台所では、ハイテンションのふたばと対照的に、淡々と炊事をこなす三女ひとは。家族4人分のお汁粉の準備に忙しい。

「ひと！せっかくのお正月なんスよ？もっとこう、おめでたく喜ぶべきっス！！」

「お正月になったからといって、別に何も変わらないし、騒ぐ意味がわからない」

「もぅ！そんなこと言わないで～」

「そんなことより、邪魔なんだけど……」

ふたばはひとはのほっぺを後ろからひたすらに揉みまくる。何を隠そう、ひとはのほっぺの柔らかさは、おっぱい（Cカップ）みたいで気持ちいいのだ。ひとはは触られているにも関わらず、無表情のまま炊事を続ける。

「……まったく、朝から騒々しいわね。正月くらい静かにできないの？」

「あっ、みっちゃん！」

文句を垂れながら階段を降りてくるのは、長女みっちゃんことみつば。冬でもミニスカが彼女のポリシー。

「みっちゃん！あけましておめでとうっス！！」

「……足りないわ」

「え？なにがスか？」

「私にめでたさを表現するなら、土下座して頭を地面にくっつけながら言うのが常識でしょ！？そんなこともわからないの！？」

「お、押忍！」

ペタリ　みつばに言われたとおり、ふたばはみつばの前に土下座。深々と頭を下げ

「あけましておめでとうっス！！」

「なってないわ！もっと頭を下げなさいよ！」

グリグリグリグリ　みつばは悦の表情でふたばの頭を足で踏みつける。彼女はドSなのだ。見かねたひとはは、お餅を焼く前にみつばに言う。

「みっちゃん。みっちゃんは来年の新弟子審査にパスしなきゃだから、お餅は5個くらい食べるよね？」

「誰が新弟子審査を受けるのよ！！そんなに食べたら太るでしょーが！」

みつばは自分の体重がけっこうアレなことを気にかけている。年頃の女の子なら、誰しも思うことではある。そのことを周りから指摘され、気にしているもののダイエットはまったくうまくいかない。

「お餅なんて食べたら、太るじゃない！」

「おいしくなるよう育てて……」

「誰があんたに私の体の一部を食べさせるもんですか！！」

意味不明な叫び。ひとはは、そろそろ餅を焼かないとと、みつばに聞く。

「じゃあいくつ？」

「4個よ！」

「……雌豚」

お汁粉も出来上がり、三つ子＆父草次郎（不審者・職質が常）はひとはが作ったおせちを囲み、正月を迎えた。みつばは相変わらずおせちやお汁粉をむしゃこら食べまくる。

「よく噛んで食べないと、喉に詰まるぞ？」

草次郎は一応みつばに注意するが、本人はまったく気にしていないご様子。そんな中、テレビでは新年の参拝に赴くたくさんの人々の様子が映し出されていた。たくさんの人でごった返す境内。食いついたのは、ふたば。お汁粉を食べるのをやめ、テレビを凝視。

「小生も行きたいス！！みんなもどうっスか！？」

「行かない」

即座に拒否したひとは。淡々と理由を述べる。

「わざわざ1番混んでる1日に行く意味がわからない。行くなら、人の減ってきた4日あたりに行くべきだよ」

「で、でも、それじゃなんとなく盛り上がりに欠けるっスよ！やっ

ぱり今日行くべきっス！」
「行かない」
頑なにひとはは行かない意思を示す。一瞬、しゅんとしおれたふたばだが
「そうだ！パパは！？」
父の草次郎に頼み出る。ふたばは草次郎にゾッコンなのだ。だが、草次郎は腕組みをして悲痛な表情でふたばに言う。
「悪いがふたば……。パパは……参拝に行けないんだよ」
「えっ！？なんで？」
「参拝に限らず、パパが人混みに入ると、必ず痴漢に間違われてしまうんだよ……」
三つ子は皆、何か後ろめたい気持ちに。確かに草次郎は人相が悪く見えるため何度も何度も警察に御用になってしまうのだ。ふたばはさらにしょげた。が、今までむしゃこらしてただけのみつばがようやく口を開く。
「しょうがないわねー。だったら、私が一緒に付いていってあげなくもないわよ？」
「ホ、ホントに！？みっちゃん！」
ふたばの顔が一気に輝く。

「わざわざ小生のために来てくれるんスか！？」

「ち、違うわよ！私はただ、出店の焼きそばとかたこ焼きを食べに行きたいだけよ！あんたのためなんかじゃないわよ！」

完全なる照れ隠しをしながらみつばは言う。さらに加えて

「その代わり、向こうに着いたら、りんごあめとチョコバナナとたい焼きと甘栗をおごりなさいよ！」

「押忍っ！」

みつばはよだれを滴ながら提案。ふたばは元気良く返事。そのやり取りを聞いていたひとはは、みつばの雌豚っぷりをさらに実感したのだった。

「わっしょーい！！！！」

近くの神社にやって来た三つ子。だが、やはり元旦。人でごった返していて、賽銭箱まで海のように人が広がっていた。通る隙間もない。ひとははポツリと呟いた。

「この調子だと、お賽銭まで何時間かかるのやら……」

「ホントよ！」

みつばも腕組みをして腹を立てる。そこでふたばは、ファンタスティックな提案を持ちかけた。

「そうっス！みっちゃんが人混みにドーンとぶつかれば、脂肪の弾力でみんなどっかに飛んでくっスよ！」

「んなわけあるか！バカじゃないの！？」

「あり得るよ、みっちゃん」

「黙りなさい！」

みつばはひとはの口をぐいぐい引っ張る。ひとはも負けじとみつばのお腹をもみもみ、こねこね。

「ちょっとふたばぁ！あんたが無理やり私たちを連れてきたんだから、イスくらい持ってきなさいよ！いつまで私を立たせるつもり！？」

「も、申し訳ないっス！今からイスを調達してくるっス！」

「あ、あと、適当に屋台の食べ物を献上しなさい！いい！？」

「押忍っ！」

ふたばは真面目な顔でみつばに敬礼。トテチテトテチテ……　イスと食べ物を調達に人混みの中へと入っていった。みつばとひとはと2人だけ。

「っていうか、なんであんたまで来てるのよ。人混みは嫌だって言ってたじゃないの」

「嫌だよ。だけど、みっちゃんとふたばだけだと、必ず何か問題を起こすよ」

「起こさないわよ！」

つまりひとははダメな姉2人の監視役として付いてきたのだ。どっちが姉かわかったものではない。すると、2人の前から見知った顔がやって来た。

「げっ、みつば！？」

「げっ、って何よ！」

明らかに嫌な表情でみつばを見るのは、みつばが大嫌いなブルジョア、杉崎みく。金持ちに相応しく、高そうな紫色であしらわれた着物に、白いストール。ぴょんぴょん跳ねた髪の毛が特徴。みつば

もみつばで杉崎に対し冷ややかな目線。

「正月早々、嫌な奴に会っちゃったわね！！」

「小声で言いなさいよ、小声で！」

ギャーギャーと言い争う2人。見かねて割り込んだのは、通称杉ちゃん一味の1人、吉岡ゆき。ず太い眉毛が印象的。

「もー！2人とも！年の初めくらい仲良くしようよー！ねっ、宮ちゃん！」

「え？あ、あぁ」

困り顔の吉岡に振られたのは、同じく杉ちゃん一味の宮下。背が高く、地区のバスケチームに所属している。宮下はみつばと杉崎の不毛な争いには関与したがらず、むしろ、ひとはに接した。

「よっ！三女！今年もよろしくな！」

「よろしく、宮前さん」

「宮下だよ！！」

宮下はぷんすかぷんすか怒り出す。宮下はひとはにはなかなか名前を覚えてもらえず、宮下がしつこくひとはに構うため、ひとはには嫌われている感があるのだ。

「で、あんたたち一体何の用なの？私は今、忙しいのよ」

「嘘をつきなさい！どーせ元旦だというのに、日が昇ってからノコノコやって来て、なかなか進めないって感じじゃないの！！」

「う……！」

杉崎に見事に言い当てられ、反論できないみつば。そんな殺伐とした雰囲気の中、杉崎は1枚のチラシをみつばに渡した。みつばとひとはは一体何が書いてあるのか気になり、すぐに見る。

「『お正月・餅の早食い大会』……」

「みっちゃん、これは……」

2人はごくりと息を飲む。杉崎は誇りに満ちた表情で話を始めた。

「実は、これから境内でお餅の早食い大会があるらしいのよ。参加は自由。お餅は食べ放題よ」

「へー……」

「お餅をタダで食べ放題だなんて、滅多にない機会よ、みつばさん」

「えー……」

杉崎の甘いささやきに心動かされるみつば。まだ決めかねているが、すでによだれが。が、ひとはは冷静に言う。

「いくらみっちゃんが雌豚で大食いでも、勝つのは不可能に近いよ」

「雌豚は余計よ！……でも一理あるわね。さすがに、大人には……」

子供レベルの大食いなどたかが知れている。モノホンの力士が出てきたりでもしたら、すぐ負けるだろう。が、杉崎は悪そうな笑顔でひとはを説得にかかった。

「三女さん。実はね、大会の優勝者には、賞金１０万円とお餅１０ｋｇが進呈されるんですって」

「賞金……！お餅１０ｋｇ……！」

ひとはの心がものすごい勢いで動いた。今、丸井家の家計は火の車。どれだけの食費が浮くだろうか。むふぅ……むふぅ……！　考えただけで、ひとはの気分は高揚してきた。一転し、みつばに大会出場を勧める。

「みっちゃん。大丈夫、勝てるよ！」

「え？でも……」

「常日頃からみっちゃんの食いっぷりを見てる私が言うんだから、間違いないよ」

「……うーん」

「あぁ、もうすぐ大会が始まるわ！みつば！早くしなさいよ！」

ひとはと一緒に杉崎も出場を後押し。みつばもこれだけ言われたら、なんとなく勝てる気になってきた。腹は据わった。

「仕方ないわね！あんたたちがそこまで言うなら、出てやるわよ！」

「さすが雌……みっちゃん！」

「ちょっとあんた！今、雌豚って言おうとしたでしょ！！まぁいいわ。で、境内だっけ？」

みつばは興奮するひとはと共に、人混みを掻い潜り境内へと向かう。残された杉崎一味。吉岡も宮下も意外に思っていた。

「珍しいね。杉ちゃんがみっちゃんにあんなこと教えるなんて」

「そうだな。てっきり、出場させないように妨害するのかと思ったよ」

吉岡と宮下は素直に感心。が、次の瞬間、杉崎は着物の裾から自分の携帯電話を取り出し、うひひと笑い始めた。

「バカみつばめ！いくらあんたが雌豚でも、大人に勝てるわけないじゃない！息巻いてたくさんの餅を食べて、体重の増加に拍車をかけるがいいわ！そして苦しむみつばをもれなく撮影してやるわ！あー楽しみ！！」

（（やっぱり……））

やはり裏があった……　吉岡も宮下もすぐに前言を撤回するのだった。

一方のふたば。みつばにあれこれ言われたものの、何から手をつけたらいいかわからず、右往左往。知らず知らずのうちに、神社の中にある公園にたどり着いてしまった。

「おかしいス……。なかなか見つからないものっス……あ！！」

ふたばはようやくある物を見つけた。みつばに言われたイスである。だが、イスと言っても、地面に固定されたベンチのような物なので、簡単に取り外しはできない。ふたばはちょっと困った顔に。

「でも……これもみっちゃんのためっス！！うんぐー！」

メキメキメキメキ……　バキッ！　ふたば渾身の怪力で固定されたベンチはいとも簡単に地面から切り離された。ふたばはご満悦の表情。

「ふぅー。一件落着ス！」

「わぁー！なにやってんだお前ーっ！」

「え？」

ふたばはベンチを持ったまま振り返る。そこには、ガクガクと足を震わせる、クラスメート、たぶん優等生佐藤信也が。トテチテ……　ふたばは佐藤に近寄った。

「しんちゃん！あけましておめでとうっス！」

「おめでとう……じゃねーよ！なにやってんだよ！！」

「なにがスか？」

「なにがじゃねーよ！ベンチだよ、ベンチ！！」

「あ、これスか」

「そうだよ！せっかく、ここで屋台で買ってきた物を食べようと思ったのに」

佐藤の両手には、屋台で買った焼きそばとたこ焼きが。ベンチがなければ座って食べられない。

「このベンチ、しんちゃんたちのだったんスね！」

「誰のとかじゃないから……」

もう何も言うまいと、佐藤は諦めた表情。ふたばはうっかりうっかりと、舌をペロッと覗かせた。

「で、ふたば。なんでベンチを壊したりしたんだ？」
「壊したわけじゃないス。みっちゃんが必要としてるから、持っていってあげようと思ったんスけど……」
「あぁ……そうなんだ。間違いなく、何か言われるだろうよ」
「？」
ふたばは悪びれる様子はない感じ。
「そうだ！せっかくだからしんちゃんも一緒に来るっスよ！みんなで食べた方がおいしいっス！」
「お、おい！待て！そのベンチは……！」
「さぁ、しんちゃん！」
「うぉ！バカ！やめろ！」
ふたばは片腕でひょいと佐藤を持ち上げ、ベンチの上に座らせた。そのまま、佐藤の乗ったベンチを担ぎ、ふたばはみつばを探すべく人混みの中へと入っていく。人混みの中に消えた2人。近くの木の陰から、その様子を見ていた3人組がいた。
「ふたばめ……！新年早々佐藤くんと……ゆ、許せないわ！」
ワナワナと震えているのは、佐藤が好きでしょうがない隊（ＳＳＳ）隊長、恋する暴走機関車、緒方愛梨。通称おがちん。いつでも

ノーパンにジャンパースカートというデンジャラスな生活を送っている。

「こうなったら、破魔矢でふたばを撃ち抜いて……」

ふたば暗殺計画を企てるのは、同じくＳＳＳの、恋する腹黒お姉さん伊藤詩織。佐藤のためなら、どんな手段をも用いるある意味一番怖い人だ。

「ちょっ……詩織ちゃん、さすがにそれは……」

困り顔で詩織を止めようとするのは、同じくＳＳＳ、恋するまともな人、加藤真由美。３人の中では、一応一番常識人。

「でも、すごいよ、おがちん！」

「なにがよ、詩織」

「だって、朝起きたら、佐藤くんが神社に来るかもって閃いたんでしょ？すごい予知能力だよ！」

詩織は手放しでおがちんを誉める。おがちんも得意気になり、不敵な笑い声。

「実はね、夢のお告げだったのよ……」

「「夢のお告げ？」」

「そうよ。初夢ってあるじゃない？」

初夢――1富士2鷹3なすび。この3つはとても縁起が良いものとされ、夢で見ると何かと良いことが起きるのだ。ちなみに初夢とは正確には1月2日の夢であり、おがちんはまだ初夢を見ていない。そんなことなど知らず、話を続けた。

「1佐藤くん、2佐藤くん、3佐藤くん！なんと、夢に佐藤くんが3人も出てきたのよ！そして、私の耳元でささやいたの……。『愛梨……初詣で会おう』って！！」

キャー！　1人テンションの上がるおがちん。詩織と真由美は、なんとも言えない表情だったが、事実として佐藤には出会えた。

「あっ！こんなことしている場合じゃないわ！早く佐藤くんをふたばから取り返しましょう！！」

おがちんを先頭に、3人は佐藤を追うため、人混みの中へと入ろうとした……が、人混みに触れた瞬間、おがちんはぶるぶると震えその場に倒れた。真由美があわてて持ち上げる。

「だ、大丈夫おがちん！？」

「さ、佐藤くん以外の男に触れたから……体が腐っ……ガクッ」

「おがちん！！おがちんしっかり！」

おがちんしばしリタイア。真由美はおがちんの心配をするが、詩織は真由美に言う。

「真由美ちゃん。私はおがちんの代わりに佐藤くんを追いかけておくから、後はよろしくね」

「えっ？詩織ちゃん……？」

ふふっと笑って、詩織は2人を横目に人混みの中へと行ってしまった。

餅の早食い大会に出場することを決めたみつば。ひとはや杉崎一味も、みつばの後に続いて境内を目指す。だが、いかんせん人混みでなかなか前に進まない。みつばのフラストレーションはどんどん溜まる。

「なんなのよ、もー！早く行かなきゃ始まっちゃうじゃないのよ！」

「みっちゃんすごい汗だね……」

吉岡は心配そうにみつばを見る。確かに、みつばはすでに人混みの中で揉まれて汗だくに。とても冬とは思えない。湯気が周りに立ち込めた。ぎゅうぎゅうと体を押される中、宮下があることに気付く。

「お、おいっ。三女がいないぞ？」

「えっ？ひとはが？」

みつばはすぐに周りを見渡す。確かにひとはがいつの間にかいなくなっている。しかも探そうにも、人の壁に阻まれ探すに探せない。

「仕方ない妹ね」

「どうするの？みっちゃん」

「まぁひとはなら、なんとかやっていけるわよ。それより、私たちは境内を目指すわよ！」

「……みんな、いない」

ひとはは1人、境内の側まで来ていた。この人混みの中、すぃー……すぃー……とわずかな隙間を縫ってきたのだ。存在感のなさが活きた形に。みんなが来るまで、時間をつぶそうと出店に目を向けた、その時、ひとはの目が急に輝く。そして、一目散に出店に急いだ。

（ガ、ガチレンジャーのお面……！）

むふぅ……！　ひとはのテンションが上がる。ガチレンジャーとは、大人から子供まで楽しめると話題のヒーロー戦隊特撮アニメ。決め台詞は『ガチの怒りを受け止めろ！』。ひとははガチレンの大ファンなのだ。ガチレッドのお面に釘付けだ。

（欲しい……）

欲しいが、お小遣いは限られている。しばらく悩み、悩み、悩みぬき、ひとははなけなしのお小遣いでお面を買うことに。お面を買い、満足感あふれる。が、そんな満足感が一瞬で吹き飛ぶことに。

「やっぱり三女さんだわ！三女さんでしょ！」

お面の出店にいたひとはに積極的に声をかけてきたのは、クラス1変な人と名高い、オカルト大好き松岡咲子。ひとはを霊能力者と勘違いし、ひとはは何かと敬遠している。ここでも例に漏れず、ひ

とはは嫌な顔に。

「ま、松岡さん……なぜここに……」

「やーね、三女さん。お正月の神社といえば、悪霊の集まる宝庫じゃない！参拝する人たちを悪霊からお守りするのが、私たちの役目よ！」

「たち……」

「三女さんもこれから悪霊払いに行くんでしょ？」

首から大きな数珠をぶら下げる松岡。ひとははなんとかこの場を去ろうと、松岡に言う。

「私、これから境内で待ち合わせがあるから……」

「えっ！？まさか、もうすでに神社の人とお知り合いに！？」

「ち、違っ……」

「さすが三女さん！ね、私にも紹介してくれない！？」

逃げようとしたが、逆効果。さらに、お面についても触れられた。

「もしかして、そのお面は除霊グッズね！悪霊に顔を見られないように顔を隠す道具を持ち歩くなんて……さすがだわ！！」

「意味がわからない……。ただ、ここで買っただけだよ」

「もしや、ここは除霊グッズ専門店！？」

「もう嫌……」

すべてが変な方向に向かうひとは。元旦だというのに、1年分の体力を使い果たしたような錯覚に襲われるのだった。

人の波に流されながらもようやく境内までたどり着いたみつばと杉崎たち。すでにみつばは疲労困憊だ。

「ぜぇ……ぜぇ……！で、受付はどこなの！？」

「あそこじゃない？」

杉崎は境内の近く、ある一ヶ所を指差した。そこには、相撲取りや巨漢など、明らかに体つきの大きい人々が。ざっと１０人程度はいるであろう。杉崎はみつばを後押し。

「さっ、みつばさん。早いとこエントリーしてきなさいよ」

「言われなくてもわかってるわよ！」

荒々しい鼻息でみつばは一団に向かって歩き始める。杉崎たちは、みつばがいなくなると、特設会場へと先に移動。みつばの登場を待った。

「大丈夫かなぁ？みっちゃん……」

「なんか……嫌な予感しかしないけどな……」

吉岡も宮下も、みつばの身を案じている。その頃、エントリーに向かったみつばだが、主宰者側から、疑いの目で見られ、説明に追われていた。

「君、小学生だよね？ホントに大丈夫なの？」

「だから、何度も言ってるじゃない！！出るったら出るのよ！！」

「毎年いるんだよ、大食いって言っても、たいしたことないっていうか、自己満足な人が……」

「はぁ！？だから何！？あんたに私の何がわかるのよ！？」

「でもねぇ……」

「さっきから口答えばっかり！あんた童貞！？」

みつばは納得しない係員にイライラ。しまいに罵詈雑言をぶちまける。

「と　に　か　く！私が出るってんだから、出るのよ！！」

みつばはごり押しで話を進める。係員もしぶしぶ折れ、みつばの参加を了承。いよいよ、餅の早食い大会が始まる。境内に設置された特設ブース。元旦だけあり、かなりの数の見物人で溢れていた。ひとはや松岡、杉崎一味も、人混みの中からみつばの登場を今か今かと待っている。

「来たわよ！」

杉崎は思わず大声を出した。大男たちに紛れて、みつばは特設ブースに現れた。いくつも並ぶパイプイス。あろうことかみつばは、センターに陣取った。

（ふふふ……。愚民たちがこの私の勇姿を今か今かと待ちわびているわね。気分爽快だわ）

みつばは1人優越感に浸る。ひとはは、みつばにぜひ優勝してもらうべく、声援を送った。

「みっちゃん。１０万円だよ１０万円」

「わかってるわよ！１０万円あったら、毎日焼き肉に寿司三昧ね！」

「違うよ。まずは新しい電子レンジ買おうよ。ふたばが壊したやつ」
「電子レンジなんて買っても食べられないでしょ！？焼き肉よ！焼き肉！」

まさに取らぬ狸の皮算用。まったく無意味な言い争いである。そんなこんなで開始の時間がやって来た。出場者の前に、つきたての餅が運ばれてくる。みつばは、さすがに青ざめた。

（こ、この量……ハ、ハンパじゃないわ！こんなの食べられるわけないじゃない！！）

１ｋｇは優にあるであろうその量。みつばはチラッと隣を見る。みつばと違い、大男はやる気に満ちていた。見物人に目をやるみつば。全員、みつばと目を合わせようとしなかった。

（みっちゃん……無理だよ。勝てるわけないよ）

ひとははようやく事の無謀さを悟る。それでも、容赦なく、ピーッと開始の笛が鳴らされた。餅にがっつくみつばを除く各参加者。みつばは、一向に手をつけようとしない。それでも、食べないわけにはいかなかった。

（……あんなに息巻いて参加しといて、全然ダメだったら、赤っ恥だわ！なんとか……なんとか……）

パクっ！　ようやくみつばも餅を食べ始めた。ひとはや杉崎一味も、みつばに声援を送る。

「頑張れみっちゃん！」

「食べろみつば！！」

「ファイトだよ！みっちゃん」

「負けんなみつばー！」

……しかし、そうはいっても力の差は歴然たるものがある。抗いがたき胃袋の差。みつばはもう土俵際に追い込まれている。一向に口が動かない。口の中も、餅でいっぱいだ。

（せ、せめて……せめて水を……！）

みつばは用意されていたコップに手を伸ばした。ぐびぐび……水で餅を流し込む作戦。だが、それは終わりの始まりだった。みつばの様子が急変する。餅が喉に詰まってしまったのだ。

（い、息が……息が……！）

周りも、みつばの急変に気が付いた。会場が一気にざわめく。

「まずい……このままじゃみっちゃん、呼吸できなくて死んじゃう

よ」

「三女さん！怖いことといわないでよー！」

ひとはのダークな予想に吉岡は涙目。皆、混乱する最中、今までほっつき歩いていたふたばがやって来た。ベンチ＋佐藤を担いで。

「みんなここにいたんスね！探したっスよ」

「ふたば！！みっちゃんが……」

「？」

ひとはの慌ただしい様子に気付くふたば。ふたばも、餅を喉に詰まらせて苦しむみつばに気が付いた。

「みっちゃん！どうしたんスか！？」

「ぐふっ！」

ポイッ　ドチャッ！　ベンチを投げ捨て、特設ブースへと駆け上がるふたば。ベンチに乗っていた佐藤も一緒に落とされ、地面に伏した。持っていた焼きそばもたこ焼きもぐちゃぐちゃ。食べれる状態ではないが、その食べ物はいつの間にか回収されてなくなっていたという……

「ふ、ふたばぁ……！」

そんな佐藤を気にもかけず、ふたばは、苦しむみつばに駆け寄る。

「みっちゃん！大丈夫スか！？しっかりするっス！」

「……ぐ……！」

「なんスか！？」

声を出したくとも出せないみつば。ふたばはどうすればいいのかわからず、慌てふためく。ようやく、ひとはがふたばにアドバイスを送った。

「ふたば！背中を叩いて、みっちゃんの喉に詰まった餅を出すんだよ！！」

「餅！？そういうことスね！任せるっス！うっしゃー！！」

ドンドンドンドン！　ふたばは全力でみつばの背中をぶったたく。その威力は、みつばの背骨を折らんがせんとするように抜群。介護なのか、暴力なのか、どっちかわからなくなってきた。

（ヤバい……違う意味でみっちゃんが死ぬ……）

ひとはは新たな危機を感じる。

「みっちゃーん！みっちゃーん！」

「……ぶぶぉ！バッ……カッ……や……め！」

すでに餅は取れた様子。が、ふたばは加減せず叩きまくる。そして、みつばの顔が餅を詰まらせる前より青ざめ……

オロロロロロロロ……

……止まる空気。そして、すぐに動き出す会場。そこは、まさに地獄絵図のように、人々の記憶に、べったりとインプットされていった……

最後に三女さんから一言

「……シメがいまいちだね」

～おしまい

（後書き）

いかがでしたか？完全に完全に完全にパーフェクトに稚拙さＭＡＸです。これが、アマチュアとプロの違いなのでしょうね……

所々おかしな点があるかと思いますが、遠慮なくご指摘ください。もう腹を切る覚悟はできてます。切腹をお申し付けくださいまし

まぁ、切腹はしないけど、反省はしてます。内容・表現・文章ｅｔｃ……課題は山積みです

次回作があるのなら、もうちょっとマシな感じに仕上げたいとつくづく思います。そしてこれからも「みつどもえ」を応援し続けていきたいと思います。ちなみに三つ子の中だと、一番好きなのは、ひとはです（どーでもいい）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8286p/

みつどもえ－参拝中！

2011年10月9日17時48分発行